

「父なるポストモダニズムへ 心を込めて、デイヴィッド」

Infinite Jest と世代のジレンマ

林 日佳理

David Foster Wallace は、先行するポストモダニズム作家たちの影響に非常に自覚的である。John Barth や Donald Barthelme など先行世代の作家たちに対する彼の愛憎半ばする発言はいたるところに見出すことができるが、中でも1993年のLarry McCaffreyによるインタビューでは、ポストモダニズム作家たちに対する自分の立ち位置を「親子関係」の比喻で表現しながら、永遠に戻ってこない親を待ち続ける“literary orphans”であると言う (Interview 150)。このように、単に反抗し乗り越える対象としての親にとどまらない親子関係が、Wallace とポストモダニズムの作家たちとの関係を考察する上で示唆的である。しばしば「ポスト・ポストモダニズム」の作家とされる Wallace の文学史的立場を考えるにあたって、父親にあたるポストモダニスト作家たちに比べてどのような独自性を打ち出しているのだろうか (あるいは独自性と言うことすら時代遅れなのか)。本発表は、Wallace が先行世代に対して持つコンプレックスとその解決法を、彼の主著 *Infinite Jest* (1996) における Incandenza 家の父 Jim と息子たち (Orin, Mario, Hal) との関係性を導きの糸としながら考察する。このときにヒントとなるのは Adam Kelly が Wallace の小説を論じる際に提案する「新誠実 New Sincerity」である。誠実さ (sincerity) をポストモダニズム的なアイロニーに対置させる見方は、Timmer や Hassan のポスト・ポストモダニズム論にも共通するほか、Wallace 自身がエッセイでふれている。しかしこの新しい誠実さの概念は、Kelley によれば “being a ‘post-postmodernist’ of Wallace’s generation means never quite being sure whether you are one, whether you have really managed to escape narcissism, solipsism, irony and insincerity” (145) であり、ポストモダニズムからポスト・ポストモダニズムへ、父から子へ、スムーズで分かりやすい世代交代が起こったと言うのは正確ではない。この曖昧なシンセリティとアイロニーの関係は、*Infinite Jest* 中の父と子の在り方とどう関連するのだろうか。本発表では、Jim の作品群と、彼の息子たちとの関係に注目することで、先行するポストモダニズムへの意識とそのあとに残された世代の「誠実さ sincerity」の在り方について考察する。

Jim’s Works

Jim の映画監督としての作品は極端な前衛性を特徴としており、ポストモダニズム文学の実験的なメタフィクションの前衛性と重なる。例えば Jim の “The Joke” という作品は、観客の目の前にカメラが置かれ、スクリーンには観客自体の姿が投影されるという、構造的なジョークである。“The Medusa v. The Odalisque” という作品では、メデューサとオダリスクというどちらも見る者を石に変えてしまう者同士が鏡を手に戦い、その様子を見ている観客がつぎつぎ石になっていく。この、石化した人間がごろごろ転がっている状態は、アクロバティックな自己言及テクニックを操るポストモダニズムの実験的なメタフィクション作品が競合した結果残る、人間的なものが消え去った焼け野原のような状況を示唆している。Jim の作品には、ポストモダニズムのこの「むなしさ」あるいは「焼け野原感」とでもいえるものが多分に見て取れるのである。

Jim の息子 Orin の元彼女でありかつ Jim に女優として起用される Joelle van Dyne には、この「むなしさ」にはもう一步踏み込む余地があるように思われるが、把持できない。Joelle は Jim の作品を見て “Technically gorgeous, [. . .]. But oddly hollow, empty” (740)、 “no emotional movement toward an audience” (740)、 “like a very smart person conversing with himself” (740)、 “cold, allusive, invent, hostile” (740) であると感じるが、しかし同時に、「ちらっと光る何か他のもの “flashes of something else” (740)」が隠れていることにも気づく。彼女たちの戦いにも、人間的な感情やドラマ、戦いの痛みが秘められているのではと思わせる瞬間があるのだが、それは一瞬すぎて捉えられない。ここに、Wallace の前世代の作家たちに対するアンビヴァレントな意識が見られる：彼らのアイロニーと冷笑を批判する後世代においても、前世代の文学が決してそれだけではないことを感知しているのだ。問題は、戦うメデューサとオダリスクの顔を正面から見たら石化してしまうのと同様に、自己言及的な構造を切り札としているポストモダニストたちは曖昧模糊とした痛みを直接さらすことができないことだ。残るのは、いたずらにはねかえされた光で誤って攻撃された者たちの生気のない姿のみである。

Jim’s Sons

Jim の息子たちは、父親に対して愛憎併存した感情を抱えながら、コミュニケーションができないことに苦しんでいる。たとえば Orin は、父が常にアイロニーという仮面をつけているがために、その奥にある「本当

は何を考えているのか、どう思っているか」を疑い続けなければならないという不安な状態に置かれていたと語る (743)。このディスコミュニケーションの問題は、末の息子 Hal と Jim との間でさらに深刻化し、Hal のしゃべる言葉は、Jim には何も聞こえない。Jim にとっては息子がまるで映画のエキストラのように、いっさい声を発さずフレームの周縁に消えていくように見える。Hal がまだ子供であったとき、Jim が「プロフェッショナル会話士 professional conversationist」に変装し息子との会話を試みるエピソードで、Hal の発言は「'...'」と表記される。この「'...'」は彼らの「コミュニケーションできなさ」を逆説的に読者にコミュニケーションする。自己言及的に鏡像を追及し続ける Jim は、それを見ている息子を (“The Medusa v. The Odalisque”の観客のように) 石化させてしまうが、石化した Hal にとっては、自分の発言が「'...'」にしかかなりえないとしても、それこそが正直な描写なのである。語りた内容があるのにこのようにしか語れないというのはとても皮肉であるが、同時に、「語れない」ことの表現としてこれほど正直なものもないだろう。ポスト・ポストモダニズムにおいては、このように、アイロニカルであると同じくらいシンシアである——アイロニカルであるがゆえにシンシアである——という、屈折した自己批判性をはらむのである。

Jim's Son's Works

Jim の姿には、息子たちから見たポストモダニズムの複雑さと冷たさ、ほんの少しのきらめき、そして自らを疑い続けるがゆえに陥ってしまうコミュニケーション不可能という陥穽が反映されている。そんな父親に対して息子たちは、「コミュニケーションできなさ」と生真面目に向き合う。息子の声を聴かない父に対して息子たちは、父の領域である映画とテニスを組み合わせて、彼らなりの作品——テニスアカデミーでの生活の紹介という形をとった短編映画 *Tennis and the Feral Prodigy*——を作る。この作品の中で Hal と Mario は、テニスゲームのマテリアリズムを再解釈し、Hal のナレーションと Mario のカメラのレンズを通して、父の遺産と彼らから見えた父を描くことで、その系譜とコンプレックスとを同時に表している。このテニス観——人間観——は、父から教わったものに息子たちがアレンジを加えて作り上げたものである。フランクで親し気な “you” という呼びかけを多用して、Hal たちは語る。Jim の耳には「'...'」としか聞こえないかもしれなくても、*Infinite Jest* のこの部分 Wallace のポスト・ポストモダニストとしての立場を非常によく示すものである。すなわち、ディスコミュニケーションを承知したうえで、それでも半ば故障したナイーブな言表を続けていくということだ。ポストモダニズムのアイロニー合戦が終わった後の焼け野原では、このような捨て身の戦略しか残っていないだろう、というのが Wallace の New Sincerity なのだ。

本発表では、David Foster Wallace のポストモダニストの先人たちに対する矛盾含みの態度を、*Infinite Jest* の Jim とその息子たちの関係を重ね合わせることで考察した。Jim の作品のポストモダン性は、自己言及的でアイロニカルな攻撃を繰り返すあまり、無限の自己懐疑に陥ってしまう。若い世代がコミュニケーションを図ろうと近づいても、お互いに擦り合わすことすら不可能なほどに。そこで息子たちは父を自滅させたものの遺産を引き継ぎながらも、戦略的に、ナイーブすぎるほどに、アイロニーという鎧を放棄する。単なる「'...'」という表記に過ぎなくても、表すことを——コミュニケーションを試みることを——やめないのだ。

Hal と Mario が自分たちの作品 *Tennis and the Feral Prodigy* を作り上げたように、Wallace 自身も *Infinite Jest* を自らの「父なるポストモダニズム」に宛てて、返事が返ってこないことを承知の上で書いたのかもしれない。ならば、この 1079 ページの小説は、ポストモダニズムの父親たちに対する長い長い手紙だとも言えるだろう。電子レンジに頭を入れて爆発させた Jim のように、もう帰ってこない父親に向けた家族通信は、親に対する呪いの手紙でも、親からの独立を宣言する手紙でもない。むしろ、どれだけ親に影響を受けたのかを示し、かつ対等なコミュニケーションを成立させられないというジレンマに満ちた心情を吐露するものである。だとすれば、その手紙の文末は、いまや形骸化した決まり文句をアイロニカルに使いながら、その実本心なのではないかと思われるような痛切さをもって、このように結ぶのがふさわしいだろう：“Sincerely yours, David.”

Selected Works Cited

Kelly, Adam. “David Foster Wallace and the New Sincerity in American Fiction.” *Consider David Foster Wallace: Critical Essays*, edited by David Hering, Sideshow Media Group Press, 2010, pp. 131-46.

Wallace, David Foster. *Infinite Jest*. 1996. Little, Brown. 2006.

---. “An Interview with David Foster Wallace.” Interview by Larry McCaffery. *Review of Contemporary Fiction*, 1993, vol. 13, no. 2, pp. 127-50.